石川達三

私の少数意見

石川達三
私の
少数意見

河出書房新社

私の小数意見　定価 五二〇円

昭和42年11月5日　初版発行
昭和46年5月20日　10版発行

著者　石川達三
発行者　中島隆之
印刷者　内海精一
発行所　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町3の6
電話　東京（292）3711
振替口座　東京　108002番

落丁・乱丁の場合はお取替いたします

©1971

印刷　内海印刷　製本　小泉製本

0095—036721—0961

目次

戦後二十年

政治と社会

戦後二十年 11
ヒロイズム 12
礼節 14
通俗投資 15
野次馬根性 17
吹原事件 19
茨城県笠間市長 21
自主性 23
犬養道子の手紙 26
共産党の大工さん 29
抵抗運動 31
患者の立場から 33
職業を大切に 35
人権擁護 38

飛行機の上から 40
戦争への接近 43
公害問題 46
自己批判 47
資金カンパ 50
儀式について 53
勲章について 55
人間ドック 57
癌と丹毒 59
サン・グラス 60
服装について 63
子供タレント 65
民主国家と徴兵制度 67
青年の跳梁 70
文明人の衰弱 71
家族制度がなくなって 73
礼儀知らず 76
速力の犠牲 78
混血児の問題 80
将来の生活 82
政治家の頭 84
完全看護 87
右翼 88
劉鄧批判 89
性の解放 90
癌を考える 94
総選挙を終って 96
言論は無力なのか 100

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

人権問題への疑問 104
はしたない…… 111

文化・教育

科学の地獄 115
生命の尊重 145
日蓮嫌い 117
農業と教育 148
幼稚園 119
言論の自由 150
芸術の効用 122
共産主義の宿命 153
文語体への郷愁 124
経済成長と文化 157
過剰文化 128
低俗文化 160
大学の伝統 131
社会科教育 164
生殖の美 132
自由の在り方 167
消耗性文化 138
大学教育 168
学制改革案 141
学校の運動競技 171
無能な母たち 143
私の大学 173

綴り方について　175
人間の遊び　177

芸術その他

文学・芸術

白鳥文学碑　183
抽象音楽　186
横光利一　188
性の追求　191
芝居を見て　194
新聞小説　195
鷗外の『雁』　198
三島君の『英霊の聲』　200
高見順　203
天皇の伝記　206
映画の衰弱　208
最後の文士　209
現代語訳　211
リアリズムの衰弱　214
日本的文学　217
演技の虚しさ　218
ピカソとブラック　220
文学全集　221

有馬君の作品 224
芸術家の個人主義 225
ヴラマンク 228
芸術の衰亡 230
評価の変動 233
文学の輸出 235
小説の位置 237
文学の在り方 241
著作権法改定草案について 244

その他

犬について 249
孔子について 252
死について 254
原罪 258
女は被害者 260
凌辱について 262
魔女 264
後記

装幀＝粟津　潔

私の少数意見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

戦後二十年

政治と社会

戦後二十年

戦争が終ってから二十年たった。

戦後二十年というのは日本だけのことではない。米国も中国も東南アジアもソ連も欧州も、みんな戦後二十年たったわけだ。二十年たった今日までに、もうあちらこちらで戦争をしている。キューバ、ヴェトナム、朝鮮、コンゴ、アルゼリア、中印国境、等々。一番たくさん戦争をしたのは米国だった。米国は前の大戦で、国土の中が戦場にはならなかった。だから一番懲りていないのかも知れない。

日本も馬関戦争以後は、国内を戦場にして外国と闘ったことはなかった。だから戦争の本当の惨酷さを知らなかった。戦勝の喜びばかりを計算に入れて、あの大戦争をやってしまっ

たのではなかろうか。その意味では米国も一度懲りる必要がありそうだ。

ユネスコ憲章によると、（戦争は先ず人間の心のなかから起る）ものだということになっている。この憲章の中の（人間）というのは不特定の一般民衆を指しているように思われるが、私は賛成しがたい。これは戦争の責任を一般民衆に帰せしめるものであって、国家や軍部の指導層に責任がないかの如くに聞える。ごま化してはいけない。一般民衆がいくら心の中で戦争を望んでも、そんなことで近代戦争は起るものではない。私はむしろ現代の戦争はきわめて少数の、わずか五六人の国家の首脳部の連中によって惹き起されるものだと思っている。逆に、国家の首脳部にいる五六人が絶対に戦争を避けようと考えるならば、確実に避け得られるのではないだろうか。キューバに於ける米ソの衝突は、フルシチョフの譲歩によって避け得られた。ヴェトナムの戦争はただ一人のジョンソンの決意によって避け得られる筈だと思う。

ヒロイズム

政府や軍部の首脳部の連中の考え方というものが、私には理解できない。彼等は多分、国

家という立場から、その利害得失を計算して、利があると見れば戦争を起すのであろう。その場合、彼はみずから国家と一致しているのであろうか。彼自身（個人としての彼自身）はそのとき、どこかに消え去っているのであろうか。もしも彼の心のなかに少しでも個人が残っていたとすれば、何万何十万の国民の命を犠牲にし、その家族に巨大な悲しみを与え、国民に厖大な税を負担せしめるという惨酷な事業を、国民に命令する勇気は出て来ないだろうと思われる。しかもそれは賭けなのだ。負けた場合のことまで計算に入れて置かなくてはならない筈である。

私のような一介の文士は、いつの場合にも個人を考えずにはいられない。国家よりも先に個人のことを考える。（民族社会の繁栄のため）と言えば大義名分は立つだろうが、私は戦争によって犠牲にされる個人の方に執着する。戦争を計画し指令する人物というのは、私などには理解できないような、一種超人的な神経をもっていなくてはならないだろう。それは人間としては異常ではないだろうか。その異常な神経は、多分ヒロイズムというものであろう。

ヨーロッパの歴史は（血を以て記されている）という言葉がある。言い換えればそれは（ヒロイズムの惨憺たる歴史）ではないだろうか。ユネスコ憲章の言葉は次のように書き直

す方が正しいように思われる。（戦争は国家の指導者の誤れるヒロイズムから起るものである）と。

礼　節

日本はこの二十年のあいだに、なかば灰燼と化した国土の上にめざましい復興を為しとげた。戦災であれほど痛めつけられた上に、さらに戦後のインフレーションに苦しめられながら、短期間にこれほどの建設をやり遂げた日本人のエネルギーは歎賞に値する。しかし物質文化だけが復興して、精神的には荒廃がつづいているようでもある。

敗戦の直後、まず必要なものは物質生活の充実であった。精神はあと廻しにされた。しかし今や衣食は足りているのだから、今度は（礼節を知る）必要があるだろう。けれども今日の発達した物質文化のなかでは、礼節などというまだるっこいことは過去のものになってしまったのかも知れない。自由と平等の思想が、（人の上に人を造らず）というスローガンが、どこかで誤解されて、礼節もまた封建時代の遺物だと考えられるようになったらしい。

物質的な幸福が、いまでは精神の幸福を圧迫し、幸福は物質的なものだけで足りるという

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com